



1 明北小6年生家庭科『明科北認定こども園を訪問交流』

家庭科の単元「共に生きる地域での生活」において、子どもたちは、自分たちで地域とどんな関わりができそうか話し合いました。幾つかの提案の中から、身近にある北こども園を訪問し、園児と交流することを選びました。目標は「こども園の子たちと仲良くなる」「明科をより好きになってもらう」に決めました。

目標を決めたものの、なかなかイメージが浮かばず、計画する前に、園にお願いして全員で下見をさせていただきました。園児や施設の様子を見せていただいた際、園長先生から、「園では命を預かることを最も大切にしていること」「みなさんの姿は、園の子どもたちの憧れであること」を意識してほしいとのお話をお聞きしました。この言葉は、園の訪問交流に臨む子どもたちの心に響いたようです。

上記2つの目標から、「ケイドロ」と「読み聞かせ」を行うことに決めた子どもたちは、それぞれ担当を決めて取り組みました。「ケイドログループ」は、園児が楽しめる場づくりや、園児にも分かるルールの伝え方について考えました。「読み聞かせグループ」は、総合的な学習で“明科のよさ”を追究してきたことを活かし、映像とお話で楽しめる“明科を散歩する物語”を自分たちで制作することにトライしました。



<訪問交流当日の様子> 2月17日(火)



準備も自分たちで



ケイドロ



読み聞かせ



余った時間で だるまさんがころんだ



手をつないで くじらぐもの歌

<6年生の振り返りから>

【 準備をしているときの自分の気持ち 】

最初は、目的に合った遊びを何にするか迷って、なかなか決められなかったけど、こども園の下見に行って、みんながケイドロをしていたから「ケイドロにしよう！」となって決められてよかった。せっかくの交流だから、普通のケイドロにはない特別のルールを作ったりして、いい交流にしようとがんばった。

読み聞かせの内容や、ストーリーを考えるのが難しかったです。最初は、どういうストーリーとか、どこから始まってどこで終わるのかとか、全然決まっていなかったし、進んでなかったのでも、大丈夫かなと思ったけど、読み聞かせの人と協力して、順番を決めたり、喋る人を決めたりできてよかったです。作っている時とか、練習している時は、こども園のみんなに伝わるかとか、難しい言葉はないかななどを考えて作っていました。

【 当日の自分 】

最初にうまく自己紹介できるかな？話の内容分かってくれるかな？園児の足の速さにできるかな？という気持ちがあった。説明の時に、園のみんながちゃんと聞いてくれた。園の子が鬼を2回やってその対処を考えてなかったから困った。ケイドロ楽しいかな？少しは私たちのこと好きになってくれるかな？仲良くなれたのかな？という気持ちがあった。みんな楽しんでくれているという気持ちがあった。

「〇〇」という園児が、自分の名前を呼んでくれて、友だちになれるような交流の仕方ができたのかなと思い、良かったなと思いました。

【 終わってみての自分 】

「疲れたー」と思った。園児みんなが小学生みたいに動いたりしてくれなくて、まだ小さいなと思った。さらに、こども園の先生はすごいと思った。例えば、みんなに集まってほしい時とか、話を聞いてほしいときとか、私は全体に声をかけていた。でも先生たちは、一人に話しかけていた。園の先生は、子どもたちのことをすごくすごく知っているなと思った。学んだことは、園児に何か言う時、何人かだったら、近くに行き話しかけると良いということ。あと、思ったより、声をかけても、その通り動いてくれないということも学んだ。交流全体を通して成長したことは、学校以外（あまり知らない場所）でも臨機応変に動けるようになったということ。学校以外で何か大きな企画を考えて進めるのは、1回もやったことがなかった。でも、こども園でやってみたらできた。少し自信がついたと思う。

「楽しかった・良かった・やりきった」という気持ちになった。学んだことは、意外と言葉が通じることや、命を預かるとはどういうことかということ。交流全部を通して成長したことは、様々な視点で見る力や、小さい子と関わっていく時は、まずは小さい子の視点で考えることが大事だということ。

園を去るとき、6年生の複数の子どもたちが「バイバイ！！ありがとう！」と、別れを惜しむ園児に声をかけていました。自然と出てきた『ありがとう』の言葉には、試行錯誤した長い準備期間から訪問交流本番を終えた子どもたちの、どんな思いが込められているのでしょうか・・・。